

# 意思決定力を育成する社会科歴史授業の開発

## —津田梅子を教材として—

B4E12047 山内美希

### はじめに

本論の目的は、意思決定力育成を目指す小学校第6学年社会科歴史授業を開発することである。教材は、津田梅子を取り上げる。

2017年9月、文部科学省<sup>1</sup>は、早い段階から自分の将来を考えることができる子供を育成するために、小中学校における「起業家教育」に力を入れることを発表した。これは、キャリア教育の一環として「起業家精神（チャレンジ精神、創造性、探究心等）」や「起業家的資質・能力（情報収集・分析力、判断力、実行力、リーダーシップ、コミュニケーション等）」を有する人材を育成することが目的とされている。

起業家教育については賛否両論あるものの、今日の社会は多様化し、色々な選択肢を持つことができるため、小学校段階から将来について考えることは大変重要である。学校での学習と自分の将来との関係で意義を見出し、「なりたい自分」や「自分が果たす役割」を模索しながら、子供達一人一人が自己の進路を選択・決定できる能力を高めていく必要がある。

しかし、小学校の社会科ではどんな職業があるのか、どんなことをしているのか、どんな工夫・努力をしているかなどの「共感的理解科」の授業が多い。本論は、最終的に「将来、自分はどのような人生を歩みたいか」「どのようなライフコースを選択したいか」というように、自己の未来に意識を向け自己決定できる力の育成を目指している。

このときに参考にしたいのが、細田裕也<sup>2</sup>の卒業研究「社会史の成果を取り入れた〈未来志向〉の社会科歴史授業開発」である。細田は、個々の状況によってより合理的なライフスタイルを選択し、意思決定できる社会の一員の育成をねらいとした授業モデルを、現代—過去—未来と時系列を柔軟に組み合わせ、考案している。

〈未来志向〉の社会科歴史授業について、細田は次のように定義している<sup>3</sup>。

（自分が開発する歴史授業では）現代社会は、過去の人々によってつくられてきたものであるという現代社会への認識を深める。そして、自分も未来の歴史を作る1人であるという自覚を持たせ、よりよい未来社会を

<sup>1</sup> 文部科学省「小・中学校における起業家体験推進事業」

([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/career/detail/1374260.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/detail/1374260.htm) 閲覧日:2017年9月25日)。

<sup>2</sup> 細田裕也「社会史の成果を取り入れた〈未来志向〉の社会科歴史授業～問題史をてがかりに～」、北海道教育大学旭川校提出卒業論文。

<sup>3</sup> 細田、同上論文、p8；但し、括弧内は引用者。

形成するためには何を選択すべきかという視点から、現代的な諸課題について価値判断を行うというプロセスをとるものでもある。

つまり、<未来志向>の社会科歴史授業ならば、子どもたちに人間が主体となり歴史を動かすのだという歴史観を身につけさせることによって、未来もまた自分たちによって変えられるものであるという意識を持たせることが可能になるという。つまり、将来、自分もまた社会を動かし、歴史をつくる生活をしていくという未来社会の形成者としての自覚を育成し、現代を生きる主権者としてどう生きるべきかという意識を高めることになる。細田は述べている。そのために細田がどのような授業モデルを創り上げたか。これについては後の章で詳しく論述することにする。

細田の卒業論文では、現代社会の問題の一つである「良妻賢母」を取り上げ、歴史学習を通して、良妻賢母という文化がどのように生まれたのか、歴史的背景について理解を図っている。そして、最終的に、子どもたちに職業と家庭との関連を考えさせながら、将来、自分は女（男）として、どのような選択を行うのかという、自己の意思決定の場を設けている。

本論では、細田の授業モデルを基盤にし、様々なジェンダー問題を取り上げる。具体的に一つ例を挙げると、現代パートでは〈新・性別役割分業〉を扱う。

〈新・性別役割分業〉<sup>4</sup>とは「男は仕事、女は家庭と仕事」というものであり、現代の変化に合わせて新たに生まれたものである。今日の日本はライフコースの多様化が一般的で、働く女性が増加した。これによって男女がともに自由な意思で社会参加ができるようになってきた。しかしその一方で、「家庭」内に目を向けると依然として「家庭内の仕事は女性の役割である」という固定観念が残っている。そのために、女性は「外の仕事と家での家事」この両方を担うようになってしまったのである。

では、なぜその〈新・性別役割分業〉をジェンダー問題の一つとして取り上げるのか。今後子どもたちが大人になり、自分自身でライフコースを選択し人生を歩んでいくとき、〈新・性別役割分業〉は多くの人々が直面する問題の一つであると考えられるからである。細田の授業モデルを基盤にすることで、〈新・性別役割分業〉の概念は近年につくられたものだと認識させることができるとともに、その文化的特徴はどのように人々の意識に根付いていたのか歴史的背景を追っていくことができる。そして、ジェンダー観の社会的背景を知ったうえで、将来、自分は女（男）としてどのような選択を行うかという自己決定につなげていきたい。

しかし、細田の授業モデルのままでは1つ問題がある。それは、授業の難易度である。細田の<未来志向>の社会科歴史授業は、対象が中学生である。筆者は、小学校第6学年の歴史学習の開発を目的にしている。したがって、細田の授業モデルを基盤に据えつつも、小学校 社会科歴史授業に適したものにしなければならない。そこで、その課題を乗り越えるために「人物学習」の視点を取り入れ、教材としては「津田梅子」を取り上げる。教材で取り扱う「津田梅子」については、章を改めて詳述する。

---

<sup>4</sup> 松田茂樹 2001 「性別役割分業と新・性別役割分業：仕事と家事の二重負担（〈変容する社会と家族〉）、慶應義塾大学『哲学』第106集、p33。

人物学習は、昭和 33 年度版学習指導要領で歴史的人物の扱いが打ち出されて以来、平成 20 年度版学習指導要領に至るまで重要視されてきた。人物学習については、寺尾健夫が次のように述べている<sup>5</sup>。

人物学習は、一般には、歴史上の人物の業績や生き方を教材として人物の行為や出来事、時代の特色について理解させる歴史学習である。

つまり、人物に関わりのある事象とその時代の特徴を理解させることを学習内容としているのである。また、その時代に求められていた人物像や社会像、文化にまで目を向けさせることで、学習がさらに展開できるとされている。さらに、その時代の特徴を捉えるだけでなく、教材として取り上げた人物の生き方を自分の生き方に生かすこともできるというのである。小山田穰等は次のように述べている<sup>6</sup>。

社会科は人間の生き方に学ぶ学習であると言っても過言ではない。なかでも、今日までの人間が作り上げてきた社会や文化などについて学習する歴史学習は、人間の生き方の学習とも言える。（…中略…）「人間の生き方」に学ぶということは、過去及び現在の人間の生き方を学ぶとともに、これからの自分の生き方や在り方について考え、ひいては、自ら自己変革を遂げていこうとするところまで期待している。

このように、人物の生き方から学び、自分の生き方に生かしていけるというのである。人物学習を取り入れることで、本論が目指している「将来、自分はどうのような人生を歩みたいか」「どのようなライフコースを選択したいか」というような、自己の未来に意識を向け、自己決定するための手がかりになると考える。

そのために、意思決定力育成を目指した人物学習の先行研究として、峰明秀<sup>7</sup>、吉田正生<sup>8</sup>、山崎愛理<sup>9</sup>の授業モデルを参考にする。これらについても、後の章において詳述する。

以下、本論を次のように構成する。まず、「人物学習」についての先行研究・授業実践を分析し問題点を明らかにする（第一章）。次に、問題点を踏まえ、本論の目指す授業像を明確にする（第二章）。続いて、「津田梅子」についての教材研究を行い、教材として扱う意義について論じる（第三章）。さらに、これまでを踏まえ意思決定力を育成する社会科歴史の授業プランを作成する（第四章）。最後に、成果と今後の課題について述べる（おわりに）。

<sup>5</sup> 寺尾健夫 2004 「認知構成主義に基づく歴史人物学習の原理—アマーstpプロジェクト単元『リンカーンと奴隷解放』を手がかりとして—」、全国社会科教育学会『社会科研究』第 61 号、p1。

<sup>6</sup> 小山田穰・渡部八重子・小林賢司・小松沢昌人 1994 『人間を考える新しい社会科の授業 ④「人間の生き方」に学ぶ』東洋館出版、p.5。

<sup>7</sup> 峰明秀 1999 「意思決定を育成する中学校社会科歴史授業」、全国社会科教育学会『社会科研究』第 50 号、pp.271—280。

<sup>8</sup> 吉田正生 2003 「新しい「人物学習」の構想—制度・しくみを構成する力を育成するために—」、『社会科研究』第 58 号、pp.1—10。

<sup>9</sup> 山崎愛理 2012 「意思決定力を育成する小学校第 6 学年歴史授業の開発—ジェンダー視点を取り入れて—」、文教大学教育学部学校教育課程社会専修（提出）、平成 24 年度卒業論文集『銀観』、pp.135—179。